

(様式4)

エイズ治療拠点病院医療従事者 海外実地研修報告書

1 研修参加者

所属病院名：石川県立中央病院 糖尿病内分泌内科

職名：医師

氏名：浅野昭道

2 研修日程：平成26年11月1日～11月16日

3 研修の内容

HIV/AIDSに関連した施設見学および最新の診療・療養指導に関する講義を2週間にわたって受講した。別紙研修スケジュール表に沿って活動を行った。

4 研修の成果・感想

HIV診療において最も先進的試みを続けてきたサンフランシスコ市にて、HIVの診療、ケア、教育、社会的サポートの在り方を学ぶことができ、大変に有意義な研修となった。特に、ホームレスとなったHIV患者に対する全人的なサービスの試みは、大変貴重なものと感じられた。

ここでは、施設見学を終えての報告書を引用したい。

日報

・ Wed. 11/5. 2014

am10:00～

・ 活動タイトル ; Visit to residential facility for homeless people with HIV.
(リチャード・M・コーエンレジデンスを訪問)

・ 施設に勤務する registered nurse (RN) の トリーシャさんに案内していただいた。
入居者と会話もさせていただいた。

・ 目的 ; 生活に困窮した AIDS 患者を支援する、サンフランシスコでの社会資源やその充実のための取り組みを知る。

・ 記録者 ; 浅野昭道 (医師)

・リチャード・M・コーエンレジデンスについて

リチャード・M・コーエンレジデンスは、カストロ地区の一角、ドローレス通りから1本路地に入った所にある。静かな住宅街の中の一軒で、古くも日当たりのよい佇まいである。

ここは、HIV感染またはAIDSを患った元ホームレスの人のための居住施設として1995年に開かれた。1991年にAIDSで死亡したリチャード・コーエン氏にちなんで命名されており、在りし日の写真が飾られていたが、故人のことについては聞き逃してしまった。

建物は歴史的建造物とのこと。古いが居住空間は広く、10室の個別の寝室があり現在は9人が入居中であった。寝室の他、共用のリビング・ダイニングがあり、服薬をするブースも設けられている。広い庭とバルコニーがあり、入居者がガーデニングをしたり犬を飼ったりしている。元々はホスピスであったが、AIDS医療の進歩により罹患者の予後が改善したため、現在は居宅型生活支援施設となっている。

ポイント

① この施設は、HIV/AIDSに罹患した元ホームレスで薬物中毒や精神疾患に苦しむ人々へ無料で提供される居宅施設である。入居後は、疾病のため入院することはあるが原則生涯をここで暮らすことができる。

② 施設はRNとSWが中心となって運用管理されている。主治医はHIV専門医が担当するが、入居者によってバラバラである。食事や服薬については、栄養士、薬剤師が担当している。こられるスタッフにより、入居者は、食事、外出、服薬のサポートや体調管理、メンタルヘルスケア、急変時の対応まで幅広いサービスを受けることができる。

③ 運用費は、連邦政府からの補助や複数の財団・基金からの資金提供（資金獲得）によって拠出されている。食材はフードバンク（Open Hand、NPO）から提供されている。

④ チーム医療・ケアが実践されている。チームのコアはRNであり、その他の職種との連携をとっている。入居者の体調や検査データ、生活の様子などの情報を多職種と共有している。必要とされる社会資源はSWが手配する。入居者の外出を助けたり、話し相手となるボランティアも訪ねてくる。

⑤ 入居を希望する人は多く、順番待ちの間に亡くなる人もいる。入居すると、入居者はとても変わる。生命を脅かされる心配がなくなり安心を得る。体調も良くなる。そして、自分の身体の健康を考え始める。

・感想

ホスピスから始まったレジデンスが生活の場として引き継がれたことに、少し驚いた。公的機関であれば、閉鎖されるか他の目的に転用されることが多い。HIV/AIDSという病を抱えて生きる人を支え続け、HIVとこの国の関わりを照らし続けて欲しいと思う。

また、このような居宅型サービスの他に、これと連動する（連続する？）支援はあるのだろうかかと疑問に思った。入居待ちのホームレスの人々に有効な支援はあるのだろうか。入居の順番は？ トリアージは？ ホームレスにならないための支援は？

入居中の人を4人お見かけした。穏やかな顔つきだった。ここに来て、死ぬことよりも生きることを考えるようになったと言う。HIVに感染して築いてきた生活を失う人もいる。病気も怖い人は人を恐れる。失ったものを取り返すこともまた運でもあり人でもあると感じた。